

地域住民における精神障害者との関係性構築過程に関する研究

—当事者団体との継続的な関わりをもつ住民の“充足感”獲得過程に着目して—

○ 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 種田 綾乃 (8321)

キーワード：当事者活動、当事者団体、インクルージョン

1. 研究目的

近年わが国において、精神障害のある当事者自身による主体的活動「当事者活動」が地域にて展開されつつあり、精神障害者の社会参加を促進し、地域社会における障害理解の一助となりうるものとして期待されている。

本研究は、積極的な精神障害者当事者活動の展開される一地域において、当事者団体との継続的な関わりをもつ住民が当事者団体メンバー（精神障害者）との関係性を構築していく過程を明らかにすることを目的とする。本発表では、関係性構築の一過程である、関わりにおける“充足感”の獲得過程に着目し、その詳細を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

2010年10月～2011年2月、北海道浦河郡浦河町における精神障害者当事者団体「浦河べてるの家」との継続的な関わりをもつ一般住民16名（事前に設定した要件を満たす者を理論的抽出法により選定）に対し、対面式インタビュー調査を実施した。

インタビューは、プロセスを明らかにするための11の質問文（例：あなたが最初に精神障害という言葉を意識した時の状況についてお話しください）からなるインタビュー・ガイドを作成し、エピソード・インタビューの技法をもちいて行った。

収集したデータは、グラウンデッド・セオリー・アプローチにより継続的比較分析し、書面にて調査結果の妥当性の検証を行った。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき、調査対象者の匿名性やプライバシー等の人権に十分な配慮を行った。対象者に対し、口頭および書面による十分な研究内容の説明を行い、調査協力についての同意を得たうえで実施し、調査結果は調査協力者とともに共有し、結果の公表についての承諾を得た。

調査は、筑波大学人間総合科学研究科倫理委員会の承認を得たうえで実施した。

4. 研究結果

調査協力者における当事者団体との関わりの年数は4年～25年であり、すべての協力者

が調査時点において、当事者団体との何らかの関わりをもっていた。

26のサブカテゴリから《関心の創出》《意識的な関わり》《充足感》《臨機応変な対応》《無意識的な関わり》の関係性構築過程における5つのカテゴリが生成された。

《充足感》の獲得過程には、〈利益の享受〉〈共感〉〈精神的充足〉の3つのサブカテゴリが含まれていた。また、〈共感〉としては、「親しみ」「身近な問題」「関わる意義・学ぶ意義」の3要素、〈精神的充足〉としては、「癒し」「楽しさ」「学び」「自己肯定感」の5要素が含まれていた。

5. 考察

精神障害者当事者団体との継続的な関わりをもつ住民において、当事者団体に対して関心を創出し、当事者団体のメンバー（精神障害のある当事者）や関係者との関わりの中で〈充足感〉や多様な状況に対する〈臨機応変な対応〉を獲得し、〈意識的な関わり〉から〈無意識的な関わり〉へと移行していく一連のプロセスが明らかになった。

関係性構築の一過程である〈充足感〉に着目した分析により、当事者団体や当事者団体メンバーとの継続的な関わりを通じて住民自身が獲得する〈充足感〉として、以下三つの要素に整理された。

第一に〈利益の享受〉が挙げられ、当事者団体との仕事上での関わりによる経済的利益、あるいは、当事者団体との関わりを通じた対象者自身の人脈の拡がりやさまざまな経験や知識の獲得を通して、住民自身が、当事者団体と関わることによる肯定的要素や利益を実感していることが明らかになった。

他方、具体的な利益や成果の実感をともなわない形での充足感として、〈共感〉や〈精神的な充足〉の要素が確認された。

当事者団体の活動への参加やメンバー個人との関わりの中で、精神障害者個人の状況や心情、当事者団体のもつ理念や空間に共感を深め、精神障害のある者も自分と変わらない存在であること、精神障害は身近な問題であり、関わり・学びに意義を見出していることが確認された。また、当事者団体の理念や空間に触れ、あるいはメンバー個人の特性や才能、肯定的側面を受け止める中で、住民自身が関わりの中で〈精神的な充足〉を得ていることも確認された。メンバー個人に対する肯定的側面（純粋さ、優しさ等）の発見は、住民自身の癒しや楽しさともつながりうることが確認され、メンバーや団体関係者との関係性の中に住民自身が精神的な居場所、学びや自己肯定感を得ていることが明らかになった。

当事者団体を通じた精神障害者との継続的な関わりは、地域住民の充足感と結びつき、住民自身の生活をより豊かなものにしていく可能性があることが推察された。当事者団体・メンバーとの継続的な関わりは、住民自身の生活の質の向上や精神障害に関する経験的な学びの獲得に寄与し、地域社会における精神障害者に対する偏見の軽減や精神障害者のインクルージョン促進の一助ともなりうることが示唆された。